

国宝 沖ノ島出土品「金銅製矛鞘」についての新知見

250610

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会・宗像大社

1 経緯

「神宿る島」沖ノ島から出土した8万点の奉獻品は「古代東アジアの交流を示す物証」として「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産としての価値の中核をなす。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（福岡県・宗像市・福津市・宗像大社（以下「本協議会」という））は、本遺産群の調査研究を推進している。その一環として、令和6年度に文化庁補助事業 Innovate MUSEUM 事業により、国宝沖ノ島出土品の金属製品約4200点を含む金属製品データベースの作成を行い、地元の文化財関係者を中心とした博物館や外部研究者との連携を進める仕組みづくりを進めてきた（註1）。

本事業により、令和6年8月に宗像大社神宝館で国宝沖ノ島出土品の金属製品にX線透過撮影を行ったところ、金銅製矛鞘（図1）の鞘内部の矛に象嵌が確認された（図5）。

これを受け、元興寺文化財研究所に調査分析を委託するとともに、専門家による検討会「国宝金銅製矛鞘検討会」を立ち上げ、分析・検討を進めてきた（註2）。ここでは、その成果を報告する。

2 対象資料

金銅製矛鞘（註3）は、昭和29～30年（1954～1955）に行われた沖ノ島祭祀遺跡の第1次学術調査で岩陰祭祀段階の8号遺跡から出土した。金銅の鞘の中に鉄矛が納まり一体となった資料。類例はなく、大変貴重な資料として知られる国宝である。

なお、矛とは、やりのような長い柄を持つ武器で、刃部（穂ともいう）と柄部からなり、長い柄にふくろぶを差し込む形で固定するものを指す（図2）。

3 今回の分析で明らかになったこと

（1）鉄矛について

鉄矛は鞘から取り出すことは難しいが、元興寺文化財研究所による分析により、鉄矛全体に施された象嵌から、本来の形状等を復元できた（図9）。

矛身の全長は約28.6cm。刃部断面が三角形のいわゆる「さんかくほしきてつほこ」である。また袋部は袋部中央断面が九角形であった。袋部端には銀製の銀板装具があり、そこに銅製で鍍金されたきやどめがつく。この鞘留の脚は短く、柄まで達しないことから、矛と柄はしっかりと固定されておらず、実践的ではなく儀仗的な性格の高いものと考えられる。本製品は構造等から実用性が低く、祭祀で奉獻するために製作されたものと考えられる。

(2) 矛に施された象嵌文様について

鞘の内部に残る矛の全面に象嵌が施されていることが明らかになった(図6)。

象嵌は得られた分析データと同時代の類例から、金象嵌である可能性が高い。しかしながら、確定には更なる分析が必要である。

象嵌は矛の袋部と刃部でそれぞれ異なる文様が施されている(図7)。奈良大学名誉教授^{にしやまよういち}西山要一氏によると、象嵌の文様は「亀甲繫鳳凰文の変形」と「唐草文」が組み合わさったものとされる。矛の袋部文様は、亀甲型の六角形の枠の中に、正面を向いた一羽の^{ほうおう}鳳凰が表現される亀甲繫鳳凰文が変形したもの。亀甲繫の枠が弧線で表現され、左右に羽を広げた姿の鳳凰は表現が簡略化されたもので、細長い杏形^{あんずがた}の上は頭部、下は胴体と考えられる(図8)。刃部側の文様は、類例から「唐草文」の可能性が高い。また、象嵌文様の系譜および技法から、本資料は朝鮮半島の系譜を引き、日本で製作されたものと考えられる。

(3) 鞘について

全長約 30.5mm の金属製鞘である。鞘に対しても材料分析を行ったところ、鞘本体は銅板に金で鍍金した金銅製で、^{さやぐち}鞘口の金属板と小環はいずれも銀製であった。鞘の内部に^{みね}鋒を固定する木製の鋒受け具を装着するなど(図10)、製作技法や、形態、構造、素材等が明らかとなった。

4 金銅製矛鞘の評価

通有の鉄矛は、鉄身と木製の長柄からなる。それに対して、今回の鉄矛は、①鉄身に加え、銀製装具、鍍金された鞘留などの金具をもつ。②銀製装具をもつ金銅製鞘が付属する。③矛の全面に象嵌を施す。この3点において類例がない。特に、象嵌を全面に施す鉄矛は国内外に類例はなく、当時の東アジアにおける鞘・矛の最高峰といえる優品である。一方で、矛の構造は実用性に乏しく、沖ノ島の祭祀で奉獻することを目的として特別に作られた奉獻品と考えられる。

本資料は三角穂式鉄矛と型式が確認できたことで、朝鮮半島の系譜を引くが日本列島で作られたと考えられる。また、その年代は三角穂式鉄矛の研究と象嵌線の分析から6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられる。

5 本調査成果の意義

調査成果の意義は、大きく3つに分けられる。

- ① 金銅製矛鞘は、学術調査を経て70年前に出土し、国宝としても既によく知られていたが、今回、最新の保存科学技術と考古学の進展により、鞘内部の鉄矛の形状とその象嵌の全貌を明らかにできた。
- ② 本鉄矛は、銀製装具と金銅装鞘が付属し、加えて矛の全面に象嵌を施す点で、東アジ

アを見渡しても突出した優品といえる。また、三角穂式鉄矛であることから日本製とみられるが、同時期の古墳副葬品に類例が全く確認できない。これはヤマト政権が「一品物」として沖ノ島祭祀のために製作した可能性がある。

- ③ ヤマト政権にとっての沖ノ島祭祀の重要性が、青銅鏡を大量に奉納した古墳時代前期後半から今回の鉄矛が示す後期後半までの長期にわたり変化していないことを確認させる。また、航海安全と対外交流の成功を求める沖ノ島祭祀が変わらずにあり続けた事とともに、ヤマト政権の祭祀として沖ノ島祭祀が唯一のものである点を再確認できる資料である。

今回の象嵌を施す鉄矛の発見は、ヤマト政権がいかに沖ノ島での祭祀を重視していたかを窺わせ、沖ノ島祭祀の解明に一石を投じる資料である。

金銅製矛鞘は類例のない資料であり、今回は象嵌発見にともなう速報として発表するものである。本資料の評価については今後も調査研究を継続する必要がある。

本資料は長期にわたり宗像大社の所蔵資料として神宝館で安定的に保管されてきたものである。新しい研究手法やデータの解析によって得られた新知見は、博物館における収集保管機能により担保されるものであり、その意義は大きい。本事業（Innovate MUSEUM）の実施は博物館の調査研究、公開活用の機能・役割についても強化するものであり、「神宿る島」宗像・沖ノ島の価値・魅力の発信拠点としての活動を進展させるものである。

6 特別展示について

本調査成果についての特別展示「永い眠りから覚めた 黄金の文様 国宝金銅製矛鞘 特別公開」が宗像大社神宝館において令和7年6月14日（土）から8月31日（日）まで開催されます。今回の調査成果と国宝金銅製矛鞘をあわせてみていただける貴重な機会です。

また、世界遺産ガイダンス海の道むなかた館では関連展示「宗像武人の装い」が、令和7年6月13日（金）から7月27日（日）まで行われます。

この機会に、宗像にぜひ足をお運びください。

註

(1) 令和6年度文化庁文化芸術振興補助金 Innovate MUSEUM 事業「出土品金属製品のデジタル台帳および検索・閲覧シスの構築による博物館DXの推進事業」を世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産本遺産群の世界遺産ガイダンス施設である宗像市立海の道むなかた館を中核として、宗像大社神宝館、宗像市立大島交流館、福津市立カメリアステージ歴史資料館、福岡県立九州歴史資料館、九州国立博物館の本遺産群に関連する5館の連携体制を強化し、保存管理・公開活用を推進することを目的とした事業である。本事業の成果はデジタルアーカイブ MUNAKATA ARCHIVES に「金属製品のX線画像」データベースとして公開されている。<https://www.munakata-archives.asia/>

(2) 国宝金銅製矛鞘検討会の参加者は、下記の12名である。

齊藤大輔（島根県立八雲立つ風土記の丘）

西山要一（奈良大学名誉教授）

橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）

水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所）

初村武寛（元興寺文化財研究所）

山口繁生（元興寺文化財研究所）

菊池宣行（宗像大社文化局）

福嶋真貴子（宗像大社文化局）

横須賀倫達（文化庁文化財第一課）

岡寺未幾（福岡県九州国立博物館・世界遺産室）

加藤和歳（九州歴史資料館）

太田 智（宗像市世界遺産課）

なお、元興寺文化財研究所が行った分析は、X線ラジグラフィー、X線コンピューター断層撮影（X線CT）、蛍光X線分析、顕微鏡観察、三次元計測である。

(3) 本資料は「鞘」と一体となった「鉄矛」で、「鞘」に「鉄銚」が納まった状態であるため、鞘に重きを置く「金銅製矛鞘」の名称が長く使用されている。



図1 国宝 金銅製矛鞘
(所蔵：宗像大社)



図2 人が矛をもつイメージ

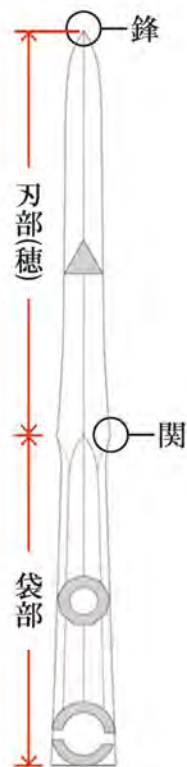


図3 矛各部名称



図4 鞘と矛（袋部端）の各部名称



図5 X線透過撮影写真
(撮影：元興寺文化財研究所)



図6 X線CTによる3次元モデル
(作成：元興寺文化財研究所)

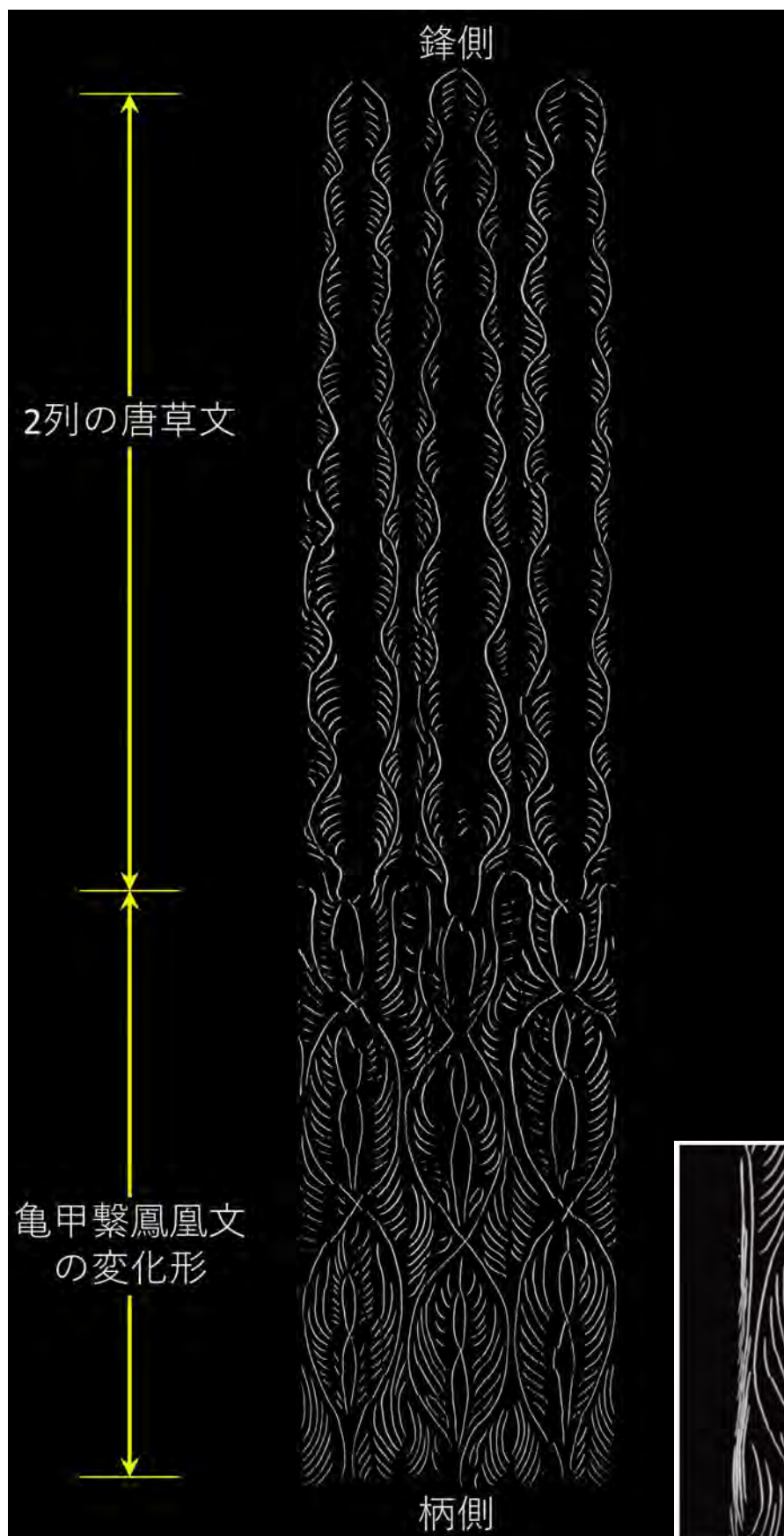


図7 象嵌文様の展開図
(作成：元興寺文化財研究所)



図8 亀甲繫鳳凰文の各部位
(作成：元興寺文化財研究所)

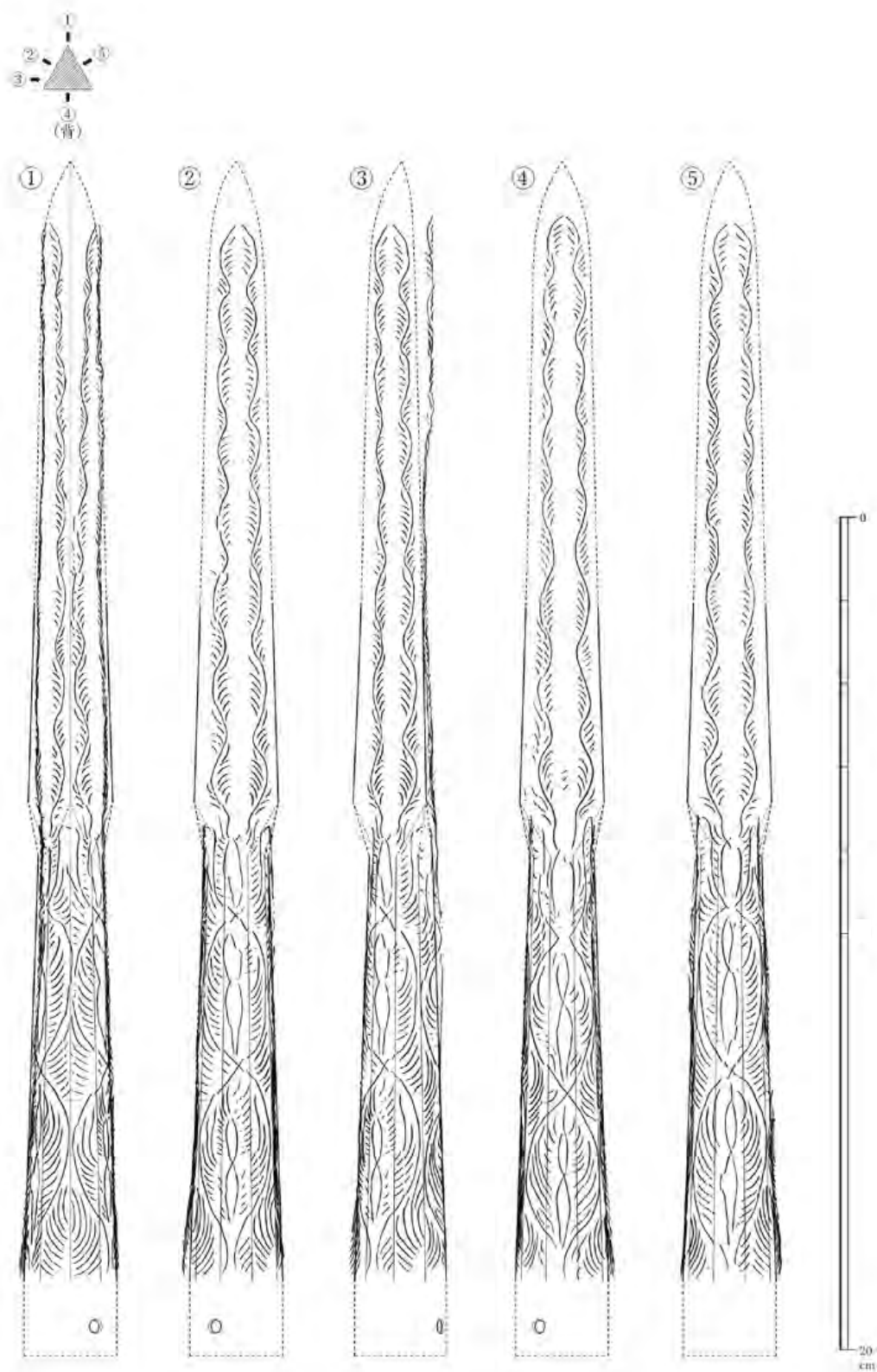


図9 推定矛身模式図
(作成：元興寺文化財研究所)

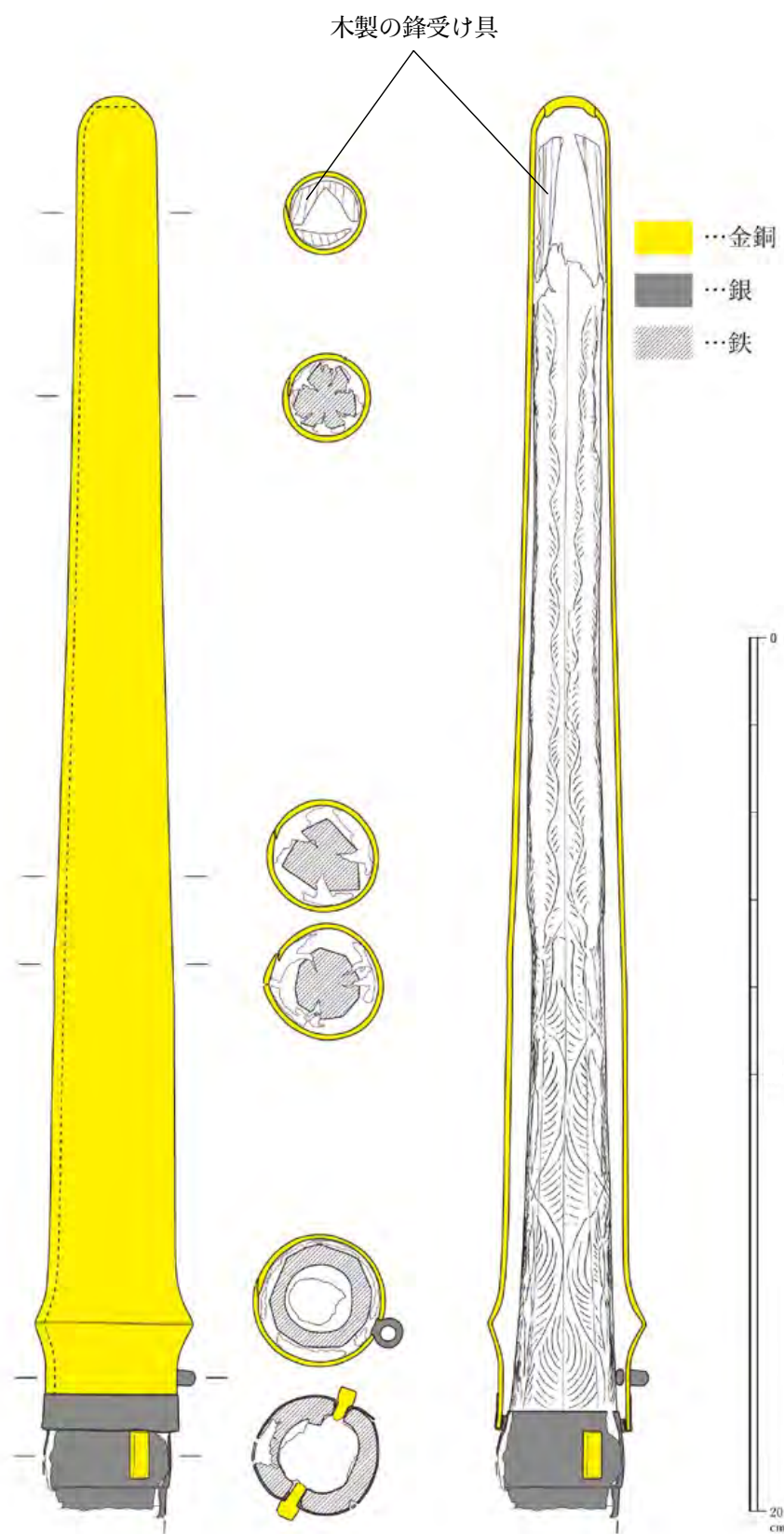


図 10 金銅製矛鞘模式図
(作成：元興寺文化財研究所)